母親が抱く「わが子のイメージ」と乳児の気質との関連

わが子のイメージへのアクセスのしやすさに着目して

蒲谷 慎介

(東京大学大学院教育学研究科・日本学術振興会)

キーワード: アタッチメント 気質 乳児

Associations between “images of the child” and infants’ temperaments.

Shinsuke KABAYA

(Graduate School of Education, The University of Tokyo, Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science)

Key Words: Attachment, Temperament, Infant

目 的

近年、母子アタッチメント研究の領域では、母親が子どもを心理的主体(psychological agent)と見なして接する態度の重要性が指摘されている(Sharp & Fonagy, 2007)。その母親の態度を支えているものの一つと考えられるのが、母親が抱く「わが子についての表象」であり、Zeanah & Benoit (1995)によるWMCI というインタビュー技法ではその表象の豊かさや偏りの無さを吟味する。

蒲谷(2013b)はWMCIの質問項目のうち、母親に「子どもの性格や行動の特徴」および「自身と子どもとの関係性」を端的に表す言葉を複数個挙げさせるものに着目し、母親の語り方の特徴を検証した。その結果、これらの質問への回答として、わが子のイメージをよどみなく産出する母親(イメージ産出容易群)は、産出に困難感を示す母親(イメージ産出困難群)よりもアタッチメント回避(avoidance)得点が低い傾向にあることが見出された。これに加えて、蒲谷(2013a)では、イメージ産出容易群と困難群の母親がむずかる乳児を見た時に、それぞれどのように心的帰属を行うのかを、共通乳児刺激を用いて検証した。その結果、容易群は困難群よりも、共通乳児刺激に対して思考認知状態の心的言及を行う割合が高かった。また困難群は、容易群とは異なり、心的帰属の仕方に偏りがある傾向が見出された。

これまでの知見を総合すると、種々のアタッチメント経験に基づき対人関係についてオープンな態度をとるようになった母親は、わが子について容易にアクセスできるイメージを持ち、乳児のアタッチメントシグナルに対しても満遍なく様々な内的状態を見出すようになるといえるかもしれない。しかしこれまでの分析では、専ら母親の要因のみに焦点を当ててきた。そこで本稿では乳児の気質に着目し、イメージ産出容易群と困難群とで、乳児にどのような特徴の差が見られるのかを検証する。

方 法

生後3~7ヶ月の乳児の母親13名(平均33.8歳)を対象としてWMCIを実施し、各母親の語りをICレコーダーで録音した。その中から「お子さんの性格や行動の特徴を表すのにふさわしい言葉を5つ挙げて下さい」および「お子さんとお母様のご関係を表すのにふさわしい言葉を5つ挙げて下さい」という2つの質問に対する各母親の語りを抜粋した。そしてそれぞれ5つの言葉を挙げ終わるまでに、「難しいな」「5つも挙げなきゃダメ?」「思い浮かびません」「よく分からない」「例えばどういう言葉を挙げればいいのか?」といったように、言語化困難を訴えた回数をカウントし、これをイメージ産出困難度得点とした。

このイメージ産出困難度得点と、回答時に母親が狼狽や困惑といったネガティブ感情を呈したかどうかを基準として、わが子イメージ産出困難群($n=7$)とイメージ産出容易群($n=$

6)を設けた。確認のため、この2群についてイメージ産出困難度得点の代表値差をWilcoxon順位検定で検証したところ、実際に容易群よりも困難群の方で得点が有意に高かった($z=2.09, p<.05$)。

乳児の気質を測定するため、母親にはRITQ 日本語版(6件法:95項目)に回答してもらった。本稿では菅原ら(1994)の見出した6因子(見知らぬ人や場所への恐れ、味覚的敏感さ、周期の規則性、フラストレーションへの耐性、視覚的敏感さ、注意の持続性と固執性)に従い、各得点を算出した。

結 果

13名の乳児の各気質得点の平均と標準偏差は、「見知らぬ人や場所への恐れ」で $M=2.32, SD=1.29$ 、「味覚的敏感さ」で $M=4.93, SD=1.44$ 、「周期の規則性」で $M=3.57, SD=1.06$ 、「フラストレーションへの耐性」で $M=3.43, SD=0.80$ 、「視覚的敏感さ」で $M=4.45, SD=0.70$ 、「注意の持続性と固執性」で $M=3.06, SD=1.11$ であった。次にイメージ産出困難群・容易群を独立変数とし、乳児の各気質得点を従属変数としたt検定を実施したところ、全ての気質得点について、有意な群間差は見られなかった。

考 察

本稿の結果からは、わが子のイメージを産出しやすい母親と産出しにくい母親の乳児間に、系統的な気質差は見出されなかった。一方で、蒲谷(2013b)ではわが子イメージの産出容易性と母親自身のアタッチメントスタイルの関連性が示唆されている。これらの一連の結果は、アタッチメントの世代間伝達の枠組みにおいて、乳児の特性よりも母親の特性(内的作業モデル)の影響を重視する立場と同様の知見と言えよう(cf. Sharp & Fonagy, 2007)。ただし、Thomas & Chess(1977)の「適合の良さ」の観点からすれば、乳児の特性としての気質は、直接的な効果を及ぼさずとも、母親の特性との組合せで、わが子イメージの成立に何かしらの影響を及ぼすかもしれない。本稿は極めて小サンプルサイズの結果であるため、母親が抱くわが子のイメージの質に乳児の気質がどのような影響を及ぼすかについては、今後改めて問う必要があるだろう。

引用文献

- 蒲谷慎介(2013a). 乳児のアタッチメントシグナルに対する母親の心的帰属:「わが子のイメージ」を容易に産出する母親の帰属スタイル. 日本赤ちゃん学会第13回学術集会,福岡県,2013年5月.
- 蒲谷慎介(2013b). 「わが子のイメージ」をよどみなく産出する母親の特徴:母親自身の一般他者アタッチメントスタイルおよび乳児の月齢との関連. 日本教育心理学会第55回総会,東京都,2013年8月.